

経営一転語 54 間接部門の考え方

会社の中には、多かれ少なかれ、直接部門と間接部門が存在します。人数が少ない会社の場合は、一人の人が直接部門の仕事をしたり、間接部門の仕事をしたりしていて、時間配分の割合が違っていると思います。

直接部門というのは、直接お客様に接し、売上に直結する仕事をしている営業部門やサービス部門のことをいいます。間接部門というのは、直接部門を支え、直接部門が仕事をしやすいように、いろんな面で配慮をしている部門です。会社組織であれば、総務部門や経理部門と考えればよいでしょう。

間接部門は、直接部門が利益を上げる手助けをするために存在しています。

ということは、間接部門が肥大化するのは、経費が増大化するので、会社にとっては、よくないことです。

人間は基本的には、勤勉なので、組織が存在すると、ついつい、しなくてよい仕事を作り、不必要な仕事まで始めるものです。不必要な仕事とは、利益に直結しない仕事のことです。

その仕事を切り捨てることができるのは、社長だけです。いらぬ伝票、いらぬ表やグラフ、いらぬ書類、放っておいたら、どんどん増えていきます。そして、終わりにはいらぬ人員まで、増えていきます。

時々社長は、会社で作成している書類の全てを、会議室などで広げて、チェックし、要らないものは、作成を止めさせるべきです。例えば一定の期間、社長室に置いておき、この書類が無いと困りますと取りに来た書類のみ渡し、他のものは破棄するという方法もあります。

間接部門の人員は最小限に抑え、作成書類も最小限に抑えるべきです。それを、チェックし止めさせることができるのは、社長しかいません。社長が「止めなさい」と言ったら、社員はこういうでしょう。「でも、これを止めたら業務に支障が出ます。」しかし、この言葉を真に受けたら、いけません。

社員は「はい、わかりました」ということは、「自分のしていた仕事は必要なかった」ことを意味するわけですから、絶対に抵抗するものです。だから、断固として、社長の権限で、不必要な仕事は、止めさせる必要があるのです。